

平成 26 年度

中学入試（1 回）

国 語 試 問

注 意 事 項

試験開始のチャイムが鳴るまで勝手にあけては
いけません。

- 1. チャイムが鳴ったら、ページ数(18 ページあります)
を確認しなさい。
- 2. どの問題からやってもかまいません。
- 3. 解答はすべて別紙の解答らんに書きなさい。

号 室		番 号		氏 名	
--------	--	--------	--	--------	--

一 次の①～⑤の [] に当てはまる言葉を語群の中から選び、漢字で答えなさい。

- ①電気系 [] が故障した。
 ②生 [] の地を訪れる。
 ③治療に [] 念する。
 ④新製品の販売で収 [] を上げる。
 ⑤ガソリンを [] 料として走る車。

《語群》

エキ セン タン トウ ネン

二 次の①～⑤の [] に当てはまる漢字一字を自分で考えて答えなさい。

- ①友人が私を正しい方向へと [] いてくれた。
 ② [] げ句の果て。
 ③ケンカが起り、 [] き添えを食う。
 ④絹は [] の繭からとる。
 ⑤本の [] し出しは、三冊までです。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この本のタイトルは『こども東北学』。こども向けの東北学の教養書みたいなふれこみだ。① だけど、東北学ってなんだろう？ っと思うひととすくなくないと思う。日本の東北地方のことを知ることか？ っと思っているひとといるだろう。そうすると、東北地方以外の地域に住んでいる人は「べつに関係ないじゃん」っと思うかもしれない。東北学って、日本の東北地方のことを知るといふ側面もあるけれど、でも、じつはそれだけじゃないんだ。

東北学の範疇② には、もうちょっと大事なことがある。それは、突飛③ に聞こえるかもしれないけれど、とりあえず「まん中じゃないところにも目を向けてみよう」、もつという④ と「ほんとうに、まん中なんてあるのかな」っという問い直しの志向⑤ さえあるんだ。

ここの東北学は、だから、世界中に遍在⑥ する〈東北〉について考えることでもある。社会がどんな仕組みでつくられ、動いているのかを、自分の目で見て、考えることだ。

それは、もちろん日本の東北地方のことを考えることでもあるし、もう少し北へ目を向ければ北海道やアイヌ民族のこと、南へ目を向ければ、沖縄・琉球、小笠原諸島や日本をとりまく島々、それから歴史の中の東アジアや南洋群島といった植民地のこと。差別の問題や飢饉⑦ の話、貧困⑧ の話も。そして、きみたちのような、こどもや若いひとたちの話も大切だし、女性やお年寄り、そして障がい者の話にもつながってゆくだろう。

そんなわけだから、「東北学」という名前はついているけれど、ほんとうは地理学的な、東北地方のことだけをテーマにしているわけではないってことなんだ。こういうことをひとつひとつついでいねいに考えることは、今回起こった原子力発電所の事故を引き起こした社会の構造それ自体の深刻な問題について考えることにも、じつはつながっていく。あるいは、放射能汚染⑨ が広がったことで、被爆⑩ に対する差別的なできごとに向き合っていくための手だてを考えるきっかけにもなるだろう。社会の複雑な仕組みを〈東北〉という場を起点として、

〔注〕 1 範疇——ここでは、「範囲」の意。 2 突飛——きわめて風変わりなさま。
 3 志向——ある目的に向かって動くこと。 4 遍在する——ひろく存在する。

自由にものを考えてみようっていうのが東北学なんだ。

③ そもそも、都会と田舎いなかというのは、べつべつに存在しているわけじゃない。みんなも知っていると思うけれど、とりわけ東京の町々は、地方からの大量の「移民」によってできあがったともいえる。都会は、田舎がつくったといっても過言注5ではない。それは、たとえば、福島原子力発電所のことを考えても同様だ。東京で使用する電力は、福島県でつくられていた。そのことを、今回の原発事故が起こるまで知らなかったひととたくさんいただろう。

もちろん電力だけではない。毎日食べている、お米や魚、肉、野菜……都会で暮らしているひとびとの食糧しょくりょうは、いったいどこでつくられているのだろう。

人間の生活は切れ目なく、どこまでもつながっている。

いうまでもなく、東北とは本来、方角をしめす言葉だ。そして、北東とは、鬼門きもんでもある。陰陽道おんみょうどうでは、とても不吉な方角らしい。とりあえず、この本の中で東北と書くときは、いわゆる東北地方という意味に、かぎりなく限定することにしよう。

三月一日の震災しんさい以来、メディアにひんぱんに登場することになったこの名称めいしょうだけれども、やはりそれでも、「東北」というかたまりの文化圏や言語圏が存在するのか、というと、やっぱり、それはちがう。青森県には津軽地方つがると南部地方があつて、さらにそれぞれの中にも、独自の地域色を持つている土地が存在する。あるいは、福島。福島県には浜通り、中通り、会津地方という三つの地域があつて、それぞれに言葉も気候風土も異なっている。もつと細かく見れば、会津地方には城下町の会津と、奥会津がある。会津と奥会津では、自然のありようが里山注6と奥山ほどにも異なっているし、冬の積雪量だつてちがう。また、戊辰戦争ぼしんの戦場になった会津、お隣の自由民権運動の舞台たいになった喜多方きたかたでは、これまた文化のおもむきがことなる。それぞれの地域での祭りのやりかたや作法もまた、さまざまだ。山形や秋田、岩手や宮城も同様で、ことにそれぞれの土地の内陸と沿岸部では、食べものや日々の暮らしも異なる。

〈注〉5 過言——言い過ぎ。

6 里山と奥山——集落の近くにあつて生活に關わりのある山と、集落から遠く離れた自然のままの山。

④ だから、「東北」は、ひよつとすると架空の場所なのかもしれない。「東北」という場所は、存在しているようで存在していない。幻想の呼び名。

そこに住まうひとたちにとって、「東北」という呼称は、とてもぎこちないものだ。すくなくとも、三陸で育ったわたしにとつては、ぎこちないものだった。自分のことを「東北出身です」ということは、まずない。出身地と形容するには、「東北」という場所は、あまりに広すぎるし、多様だ。もつとも、それは関東だつて関西だつて、九州、四国だつて、目を凝らせば、その内側は多様なのだと思う。

⑤ そして、よくよく考えてみると、自分が住んでいる場所なのに東北と名指されるのは、とても奇妙なことだ。自分がここに住んでいるのに、東北と言われる。だれだつて自分のいる場所が中心になつてはいるはずなのに、「あなたのいる場所は、あちら側」と言われている気分。妙な感覚だ。もつとも、そこまでじゃなくても、東北という呼び名の向こう側にいつも「まん中」が透けて見える、というふうにはぼんやりとでも感じたことがあるひとは、意外に多いのではないだろうか。

⑥ いや、このことは東北にかぎったことではなく、さまざまな地名をめぐつては、歴史的な根深い問題がついてまわる。たとえば、「日本」という呼び名には、「日が昇る場所」という意味があるが、そのメッセージじたいが、中国へ対する、自意識の表明でもあつた。どういふことかといえ、古い時代を遡さかのぼれば、この列島は、華夷秩序かいつじよという中国を中心にした覇権の中で、東夷とうい(東の野蛮)に位置づけられていたという歴史があつたということだ。「日本」という呼び名は、中国へ対して、そんな柵封関係さくほうかんけい、つまり上下関係に対して、「ここは辺境ではない」とみずから表明したと考えられる。地球は丸くて、どこがまん中なんて決められないはずなのに、国と国、地域と地域の間の力の強さで、地理的な力関係が形成されていく。そしてそれが呼び名や地名に反映された。「まん中」を意識して名ざされた地名たち。

「裏日本」という呼び名もどこかで聞いたことがあると思うけれど、「東北」の場合もそのように位置づけられることで、ここに住んでいるひとたちの精神性や身体性といったものは、なにがしかのかたちで「まん中」にこだわることを余儀なくされ、まん中に呪縛じゆわくさせられてきたのかもしれない。そんなことを、きみは、考えたことがあるだろうか。東北にとつての東京。あるいは国家というレベルでの、日本

〈注〉7 形容する——ここでは、「言い表す」の意。

8 覇権——ここでは、「強い力で他を支配する関係」の意。

9 呪縛——自由にものを判断できないこと。

にとつての中国。この本では、直接には触れないけれど、力を持った地域と下位に位置づけられた地域の間での、おたがいの地域主義や愛国主義がぶつかり合うことで生じるさまざまな問題とそれらは無関係ではない。

⑦ この本のタイトルで、あえて「東北」という言葉を使ったのは、じつはそれが、こんなぐあいにちつとも自明のものではないからなんだ。「東北」とはなにか、をだれも知らないし、そもそもだれひとりとして「東北」というものを見たことがないんだから。地理的な序列の中で、「東北」や「日本」という呼び名がつけられてはいるけれど、その呼び名が、ここではないどこか「別な場所」を起点に考えられているということを、一度は考えてみていいかもしれない。

(山内明美『こども東北学』より。作問の関係上、一部表現を改めたところがあります。)

※ 本文中から抜き出して答える問題では、句読点や「」などの記号は、字数に数えないものとします。

問一 — 線部①「東北学ってなんだろう？」とありますが、筆者の考える「東北学」とは何ですか。本文中の言葉を用いて、50字以内で答えなさい。

問二 — 線部②「まん中」とありますが、この言葉を筆者は文章中で複数の言葉に言い換えています。 — 線部⑥以降にある、7字の言葉抜き出さない。

問三 — 線部③「都会と田舎」というのは、べつべつに存在しているわけじゃないとありますが、そのこととほぼ同じような意味合いで用いられている10字の表現を抜き出さない。

問四 — 線部④「東北」は、ひよつとすると架空の場所なのかもしれないとありますが、筆者がそう考える理由を含む一文を見つけ、最初の5字を抜き出さない。

問五 — 線部⑤「自分が住んでいる場所なのに東北と名指されるのは、とても奇妙なことだ」とありますが、なぜ「奇妙なこと」なのか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が住んでいない場所を起点としてつけられた地名だから。
- イ ささまざまな生活習慣や気候に基づいてつけられた地名ではないから。
- ウ 陰陽道においては不吉な方角とされている地名だから。
- エ 「まん中」より劣っていることを感じさせる地名だから。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

十一歳の女の子、「わたし」美月は、「ママ」の勝手なついで夏休みを遠い親戚の家で過ごすことになりました。知らない土地で「沙耶ちゃん」という友だちができたころ、ようすを見に来た「ママ」が、「沙耶ちゃん」に無神経におみやげを押しつけようとして断られてしまいます。それ以来、「わたし」は「沙耶ちゃん」と会えていないことを気にしています。

次の日、潮風のかおる早朝の町を、わたしはママと歩いた。始発電車に乗って東京にもどり、その足で出勤するという働き者のママを、わたしは駅まで見送ることにしたのだ。

ずれた思いはそのままだったけれど、ママはわたしのことが大好きで、わたしだってほんとうのところ同じなんだという思いが、町を包むこの潮のかおりのようにわたしたちを包んでいて、今はこれでいいか……みたいな、これが親子ならではのゆるさ……。

そんなことを思いながら階段をのぼって、ホームに着くと波の音が聞こえた。それに重なって、かん、かん……と、遠い遮断機の音もする。遠く見えない景色の音が、風に乗って聞こえてくる。

A 「二週間後、お盆休みにまた飛んでくるからね。ほしいものがあつたら電話して。沙耶ちゃんにもそう言つて」

B ママは、わたしがかかえてきたトートバッグに手をのばして言った。

「ママ……、知らないって断られたでしょ。よくその人のことを知りもしないのに、すぐ何かものをあげようとするのって、どうかと思うよ」

わたしは、バッグをママにわたしながら答えた。

C 「どうして？ 好きな人には、何かあげたいと思うじゃない。自然な気持ちよ」

「好きって、沙耶ちゃんと会ってもいなかったのに」

「会ってなかったって大好きよ。美月によくしてくれる人は、みんな好き」

「……」

わたしは瞬間、いらっと、心の中で小さな火花が散るのを感じて視線をそらした。

① (まったく、ママはこれもわかってない。わたしが、そういう、べたべたした言葉を口にされるのがいやだってこと)

飛びだしかけた言葉を飲みこむために、深く息を吸いこんで、思いつきはきだした。

『別れるときに、けしてけんかはしないこと。きつと後悔するからね、別れるときは優しい言葉を使いなさい』

亡くなったママのママ、西荻のおばあちゃんが言っていた言葉を頭にうかべて、電車の来る方向を見た。

線路わきにしげる夏草の向こうから、その姿は見えてきた。と同時に駅の遮断機が鳴りだして、見る間に電車はホームへとすべりこんだ。

「……じゃあね。しょうがない、働いてくるわ」

「行つてらっしゃい」

D 「いい？ 病気はしないこと。けがもしちゃだめよ。メールはしてね」

ママはがらんとした車内に乗りこみ、手をふった。

「わかった」

わたしが手をふり返すと同時にドアが閉まる。

② 「……ありがとう、ママ」

聞こえないように、わざとドアが閉まってから言ったのに、ママはわたしの唇を読んだのか、ドアにはりついて投げキスをしてきた。

「……まったく、もう……」

③くすぐったさと、例のいらつとする気持ちを半々に感じながら、はあつと息をはきだして、小さくなつていく電車を見送った。

そうして電車の消えた線路をほつとしたような、さみしいような気持ちで、ぼんやりとしばらくながめ、くるりと背を向け、駅の階段をカタン、カタン、とおり始めたときだった。どこかで、ごん、と何かがぶつかるような小さな音がした。

顔をあげると階段の少し向こうに、張りだした枝で半分かくれた自販機が見えた。ゆらゆらと虫とり網がゆれている。(だれかいるのかしら?)と見ていると、青い野球帽をかぶった背の高い男の子が立ちあがった。

「あ……！」

思わず声が出て口を押さえ、息を止めてまばたきをした。

間違いなかった。その男の子はヒコーキくんだった。

声に気づいたヒコーキくんも、顔をあげてわたしを見ると、「あ」という形に口を開けた。

わたしはどうしよう……と思ったけれど、階段で立ち止まっているのもおかしいので、どきどきしながらおりていった。そしてだんだんヒコーキくんと距離がせばまって、すれ違ふときに、

「……おはよう」

と、勇気を出して言ってみた。

「おはよう」

と、ヒコーキくんは返事をしてくれて、それから、もうひとこと言った。

「……虫採りに来たんだ」

「虫？」

立ち止まって聞き返すと、ヒコーキくんは駅の後ろに広がる雑木林を指差して言った。

〈注 ヒコーキくん〉「わたし」がこの土地で会った子。「コーキ」という名前らしいが、「わたし」は自分の中で「ヒコーキくん」と呼んでいる。

「うん。この先に、でっかいカブトやクワガタが、いっぱいいる木があるんだって」

「へえ……」

と、わたしは雑木林のほうをのぞいてみた。

いったいどこから入るのだろうと思うほど、雑草が生いしげっている。どこまでも奥深く広がっていく林の中はうす暗く、夏の日差しも届かないに見える。こんなところによく入っていけるなあ、と、わたしが感心しながらふり向くと、ヒコーキくんと目が合った。

すると、ヒコーキくんは、ぱつと視線を首からさげた空の虫かごに落とし、次に右手に持っている買ったばかりのペットボトルのコーラに向けた。そして、そのコーラをぐいっとわたしに差し出した。

「はい」

「え？」

「あげる」

「なんで……？」

「コーラきらい？」

「ううん。でもこれ、ヒコーキくんが、今飲もうとして買ったんでしょ？」

と、わたしが答えたたん、ヒコーキくんは人差し指で自分の鼻を指差し、笑いだしそうな顔で聞き返してきた。

「——ヒコーキくん？」

はっ、と自分の失言に気づいたわたしは、火がついたように真っ赤になっていくのがわかった。

「あ、あの……、それはね……」(どうしよう……)

けれど、わたしが、なんとかその説明をしようと顔をあげたとき――

ヒコキくんは、ずっと背筋をのばして耳をすました。
そして、

「ごめん、ともだち来たから」

と、言うが早いか、わたしの手にコーラのペットボトルをぎゅつと押しつけ、虫とり網を肩に背負ってかけだした。
わたしはコーラを手に、まばたきをしてヒコキくんを見送った。

「……ともだちって？」

と、あたりを見回した。

どこにも人影は見当たらない。猫さえいない。けれど、それから三つも数えないうち、ヒコキくんの向かう道の先に、男の子が一人。
二人、三人四人と現れた。

駅からの帰り道、わたしはお日さまを飲みこんだみたいに元気だった。

そのうえなんだか体中の水分が、ソーダ水になってしまったようだった。体中のあちこちで、勝手に泡がパチパチはじけるものだから、わけもなくスキップを始めたり、くすぐたくなつて笑ったり、走り出したくなってしまう。

にぎやかに鳴きだした朝のセミも

ヨシヨシヨシヨシ

④ シンパイナイ シンパイナイ ダイジョーブ

そう言っている。

動きだした朝一番のバスも、通りをわたる磯の風も、何もかもが、きらきら光ってわたしに合図を送ってくる。

オイデヨ 美月 走ッテオイデヨ

⑤ そして、ヒコキくんのくれたコーラに、ママの言った言葉が重なる。



わたしは、どきどきしながらヒコキくんのコーラを空にかざして、目を細めた。

⑥ わたしに「はい」と、このコーラを差しだしたときの、ヒコキくんの明るい表情が空に広がる。

「ありがとう」

わたしは言えなかった言葉を空に向かって言った。

そして、そうやって朝の光に包まれて、真っ青な空を流れていく雲をながめているうちに心が決まった。

沙耶ちゃんに会いに行こう。

(薰くみこ『ぜんぶ夏のこと』より。)

※ 本文中から抜き出して答える問題では、句読点や「」などの記号は、字数に数えないものとします。

問一 ―線部①へまったく、ママはこれもわかってないについて。

I 〈これ〉が指していることを本文中から抜き出し、最初の10字を答えなさい。

II 「ママ」がへわかってないことが、Iの答え以外にも一つあります。それを含む一文を抜き出し、最初の5字を答えなさい。

問二 ―線部②へ……ありがとう、ママという言葉は、「わたし」の本心ではありませんが、「わたし」にあえてこの言葉を言わせたものは何ですか。最も適当な部分を抜き出しなさい。

問三 ―線部③のくすぐったさとは、どのような感覚ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

A 「ママ」が自分のことを気にしてくれるのはありがたいが、自分の気持ちを理解してくれないのがもどかしい。
I しつこくまとわりついてくる「ママ」の無神経さには腹が立つが、自分を愛してくれているのはうれしい。

ウ 「ママ」に投げキスをされて悪い気はしないが、他人の目を気にしない大げさな愛情表現はどうにも恥ずかしい。
エ あれこれ口出しする「ママ」がいなくなつてほつとする一方、自分を心配してくれる人がいなくなるのはさみしい。

問四 ―線部④へシンパイナイ シンパイナイ ダイジョーブは、「わたし」にどのような行動を促していますか。本文中の言葉を用いて、15字以内で答えなさい。

問五 ―線部⑤へヒコーキくんのくれたコーラに、ママの言った言葉が重なるについて。
I 直後の□には、これ以前に「ママ」が言った言葉のうちのひとつとほぼ同じものが入ります。それは――線部A～Dのうちのどれですか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

II ヘビコーキくんのくれたコーラに、ママの言った言葉が重なるとは、どういうことですか。40字前後で述べなさい。

問六 ―線部⑥へ「ありがとう」／わたしは言えなかった言葉を空に向かって言ったについて。「わたし」がコーラをもらう以前から「ヒコーキくん」に好意を持っていたことがわかる一文を抜き出し、最初の6字を答えなさい。

